

論文

系統色名の研究（第二報）

A Study of Systematic Color Names (Part II)

呂 清夫 Lü Ching-Fu National Taiwan Normal University

Abstract

In my investigations, systematic color names are used more often in written language than verbal language. With this mind, this article shall concentrate on the use of written systematic color names and include comparison of spoken systematic color names in the attempt to probe the characteristics of Chinese systematic color names. Investigation of written color names takes into account major writtens through the ages and includes statistical compilation of color names used and their respective number of appearances in these writtens. Here, if we isolate the systematic color names and respective modifiers which appear at a greater frequency, we can put together a group of systematic color names commonly used in written language. One of the characteristics of written systematic color names is brevity, which differs from the relatively longer systematic color names found in English or Japanese. In Chinese, when systematic color names are overly long, they are liable to become phrases. If these systematic color names are combined with the systematic color names derived from investigation of spoken language and then systematized, a practical set of Chinese systematic color names can be obtained.

要 旨

筆者の色名調査では、「話し言葉」よりも「書き言葉」の系統色名数のほうが多い。本論は「書き言葉」にある色名を中心に検討するが、「話し言葉」にある色名とも比較して、中国語にある系統色名の特徴を探求しようとするものである。「書き言葉」にある色名の調査は、古来の文献を対象として、その使われた色名と使用した回数を一々集計した。即ち、その中の使用頻度の高い系統色名とその修飾語とを選定すれば、実用的な中国語の系統色名セット案を組み立てることが出来るであろう。このような色名の条件は、長すぎないことである。長すぎると、名詞でなくなり、熟語になる虞れがある。それは英語や日本語にある長い系統色名とは異なるものである。これらの系統色名は、また同じ調査によって得られた「話し言葉」にある系統色名と組合わせて、その色名の組織化を試みれば、最終的に実用性のある中国語の色名セットの色名構成の草案が出来るのではなかろうかと考えた。

1. 「書き言葉」にある色名の調査

前報でもふれたように、筆者は中国語にあう系統色名の創出を考えている、それに対する調査は、慣用色名の調査と同じように、「書き言葉」と「話し言葉」とにある色名の両方を調査してきたが、「書き言葉」にある色名数は、系統色名のほうが多かったため、「書き言葉」にある色名の研究は、系統色名に重点がおかれた。

今回、筆者はまた55冊の古来の著作にある色名とそれぞれ出てきた回数を一々調べて表1のように集計した。つまり一冊の本の中にあるすべての色名を記録した。更に同じ色名ごとに、その出現した回数を集計した。これらの著作は、あらゆる種類の書物をも含んで

いるので、全部で9大分類に分けられている、即ち哲学、宗教、語学、文学、自然科学、応用科学、社会、歴史と地理、芸術などの書物である。そして各分類はそれぞれ古来の斯界の名著を選んで、その使う色名とそれぞれの使用頻度を調べた。

これらの著作の中に、編集されたものが多いので、一冊の本の中には時々、またいくつかの本や論文を含んでいる。例えば、陶器譜録(上)にはなお古窯器考、陶説、陽羨名陶録、景德鎮陶録などの古書8冊を含み、陶器譜録(下)には茗壺圖録、飲流齋説瓷、旬雅、琉璃志などの古書6冊を含み、玉石古器譜録には雲林石譜、玉紀、古玉考、骨董十三説などの古書9冊を含み、繡譜にはまた絲繡筆記、刺繡書畫録、女紅傳徴略などの古書6冊を含んでいる。

しかし、古書であるから特に部厚いものではない。

こういう色名と使用頻度の調査について、ここでは「紅樓夢」を例として説明してみたい。まず9種類の書籍に、それぞれ「紅樓夢」のような有名な著作を選んで、その基本資料として、図書分類、書名、作者、作者の本籍、全ページ数、出版時期を一々記入した。そして調査した後に、使われた色名の総個数、使われた色名の総回数を集計し、表2に示した。作者の本籍を記入するのは、本籍は色名の使用状態に影響ある要素であると考えられるためである。色名の総個数と総回数とはそれぞれ異なる次元であるから、別々に記入する必要もあろう。

調査の途中に、色名の番号を付けたのは、コンピュータで統計するためである。そして色名の出たページを記入したのは、統計の根拠であるとともに、色名の使い方を調べるのに役立つ

表1 「書き言葉」にある色名を調査するための古来の著作一覧表

分類と書名	分類と書名	分類と書名
中国古代哲学史文献選集	植物名実図考上、下	社儀禮服飾考辨
中国美学史文献選集	動物学大辞典上、下	會台湾の山地經濟
文学心理学	植物学大辞典上、下	台湾の原始經濟
商業心理学	地質鉱物学大辞典	歴骨董指南
バイブル	然台湾脊椎動物誌	史台湾省史料-生物編Ⅰ
宗教	科台湾鳥類カラー図鑑	地台湾省史料-生物編Ⅱ
佛典エッセンス	学台湾の水鳥	理台湾省史料-生物編Ⅲ
中国道教史	台湾の蛇類	
台湾民間信仰論文集	台湾常見植物図鑑	陶器譜録上、下
台湾宗教芸術	台湾高山植物	玉石古器譜録
語説文解字注		繡譜
学辞海上、下	応天工開物	藝中国宋元瓷器
北京語、台湾語対照常用辞典	用營造法式	術色彩学
紅樓夢	科中国古代建築史	台湾早期民芸
文金瓶梅	学本草綱目上、中、下	台湾民間芸術
學風蕭蕭	現代工芸概論	台湾高砂文化芸術
金色の蛇夜		
現代中国新しい文学大系上、下		

表2 「紅樓夢」にある色名の調査統計表(局部)

図書分類	書名	作者	作者本籍	ページ数	出版年	色名の総個数	色名の総回数
文学類	紅樓夢	曹雪芹	満州	1,040頁	1791年	108種	954回
色名	色名の出たページ	色名の番号	使用回数	色名	色名の出たページ	色名の番号	回数
鮮紅	775 956	R003	2	霽色	424	B316	1
	22 24 26 54 70 71			青紫	288	P006	1
	74 158 179 200 221 240			蛇紫	198	P113	1
	241 245 246 253 271 304			淨白	119 949	W109	2
大紅	338 342 344 423 424 425	R012	39	素白	597	W052	2
	432 437 449 459 462 551			蒼白	194 394	W094	2
	574 575 626 655 691 796			潔白	306 427 955	W101	3
	810 919 1033			沈黒	391	W370	1
緋紅	684	R093	1	朱	38 42 45 63 136 141	R053	9
嬌紅	198	R161	1		196 250 448		
微紅	158 288 825 875	R223	4	赤	224 263 288 293 428 446	R055	6
紅赤	853	R324	1				
紫緋	557	R393	1	緋	74 153 271 912	R081	4
青黄	853	Y108	1	赭	944	R295	1
嬌黄	347	Y184	1		7 9 20 24 26 45		
青緑	24	G010	1		66 69 95 108 113 117		
碧緑	358	G072	1	紅	119 138 141 143 150 152	R052	197
蒼翠	348	G224	1		160 163 166 176 199 243		
閃緑	423	G338	1		246 283 309 310 311 321		

ためである。

表2に示した「色名」はどんな色をしているのか、特に色表示（例えばHVCなど）は示していない。本研究では、「色名」としての字句が問題視されているからである、以下論文の全文を通していえる事柄である。

表2は文学類の一冊の本の統計に過ぎないが、その使用頻度の高い色名、例えば大紅（中国語色名の一つ。以下全ての中国語の色名は太字で示す）、微紅、朱、赤、紅などは後述の表4に含まれている。これは一冊の本からの調査結果であるが、全体の調査結果と深く関連していることを意味する。

2. 色名調査の結果

そこで調査件名を増やし、55冊の著作から、2,196個の色名を収集した。それらは色名の種類を問わずに、全部で72,917回使われている。平均して一冊当たり40個

（そして1,326回）の色名が表3のように使われており、一個の色名が重複して出現した回数は平均として23回であった。また、色名の種類によってその使われた回数は、1回から8,501回（白色）まで、状態はまちまちである。その中に使われた回数の最も多い色名を取り出して、全部で141個の系統色名があり、表4に示した。この「書き言葉」にある系統色名は、また「話し言葉」にある系統色名（表5）と合わせて174個の系統色名セットとなる。

その中にそれらの出現した回数は、8,501回から37回までであった。そして37回の色名は何ゆえにベスト141に入るかというと、全部で2,196個の色名の中の、その38%の色名、即ち826個の色名は一回しか使われていなかったからで、それから二回、三回しか使用されなかった色名も多種占めているので、ここでいう少なくとも37回以上使われた色名は、使用頻度の高い色名であり、常用的な系統色名といえる。そしてその中の

使用頻度のベスト5は、①白（8,501回）、②黄（5,195回）、③黒（4,678回）、④紅（3,957回）、⑤緑（3,219回）であり、その次は⑥青、⑦褐、⑧赤、⑨紫、⑩灰、⑪藍と⑫橙とである。また「書き言葉」にある慣用色名と系統色名とは合わせてベスト193個の色名があるので、表12によって示した。

上述したように、一冊の本に現われた色名は、平均して40個であるが、個別に見ると、色名の種類が最も多い歴史と地理類の本にある色名は、平均して一冊当りに204個があり、表1に示したように、この分類の本は、主に古代の骨董品や地元の生物などカラフルなものと関係する著作だからであろう。色名の種類が最も少ない本は、宗教類であり、バイブルを含めて平均して一冊当りに14個の色

表3 五十五冊の著作に使われた色名統計表

統計の項目\著作分類	哲学類	宗教類	語学類	文学類	自然科学類	応用科学類	社会類	歴史と地理類	芸術類	全体
調査する冊数	4	5	4	6	13	7	3	4	9	55
色名総個数	83	70	733	385	1177	481	183	815	710	2196
一冊平均に使う総個数	21	14	183	64	91	69	61	204	79	40
色名総回数	708	823	8687	5184	32238	8024	1211	8232	7810	72917
一冊平均に使う総回数	177	165	2172	864	2480	1146	404	2058	868	1326
各色名の使われた回数	8	12	12	14	27	17	7	10	11	23

表4 本研究により選定された「書き言葉」にある常用的な系統色名（案）

色系	基本色名	基本色名の組合せ	修飾語と基本色名との組合せ	複合する色名	合計
赤色系	紅 朱 猩 赤 絳	朱紅 橙紅 金紅 赤黒 紫紅 黄赤 紫赤 紅白	鮮紅 大紅 淡紅 微紅 濃紅 深紅 大赤 淺紅 赭紅 暗紅 暗朱		24
橙色系	橙 赭 褐 棕	紅褐 赤褐 綠褐 褐黒 黄褐 紫褐	淡褐 暗褐 黒褐 濃褐 深褐 灰褐	淡赤褐 淡黄褐 暗赤褐 淡灰褐	20
黄色系	黄	紅黄 朱黄 綠黄 灰黄 黄灰 赤黄 橙黄 青黄 黄白 黄黒	鮮黄 淡黄 微黄 暗黄 淺黄 深黄	淡灰黄 淡黄白	19
緑色系	綠 翠 碧	黄綠 青綠 翠綠 綠白 紫綠 碧綠 藍綠 金綠	鮮綠 濃綠 淡綠 深綠 大綠 白綠 淺綠 暗綠 黒綠 灰綠	淡黄綠	22
青色系	青 蒼 藍 紺	青藍 蒼白 青白 藍黒 蒼黒 紫藍 蒼灰 青灰 青黒	大青 深藍 淡藍 深青 淡青 黒藍		19
紫色系	紫	紅紫 青紫 紫白 紫黒 赤紫	濃紫 淡紫 深紫 黒紫 微紫 暗紫	淡紅紫	13
白黒系	白 烏 黝 灰 玄 白 黒 紺	烏黒	純白 淡白 淡灰 深灰 灰白 暗灰 淡黒 暗黒 潔白 汚白 灰黒 黒灰 深黒 純黒 黒白		24
合計	26	47	60	8	141

備考：1. 翠綠、翠藍、墨綠がある意味では、慣用色名とされた場合もある。

2. 斜体文字は「書き言葉」にある慣用的な系統色名、正体文字は「書き言葉」と「話し言葉」との重複する系統色名、重複する色名数は56個である。

名しか使われていない。次は哲学類であり、平均して一冊ごとに21個の色名しか使われていない。その原因は、これらの著作には抽象的な内容が多いからであろうと考えられる。

全体から見ると、平均して一個の色名が重複して使われた回数は23回であるが、個別的に見ると、一個の色名が重複的に使われた回数の最も多い自然科学類の本では、平均して一個の色名は27回まで上回るのに対して、一個の色名が重複的に使われた回数の最も少ない社会類と宗教類の本では、表2に示されるように一個の色名は7回しかない。歴史地理類の本では、平均して一冊当りの色名の種類は最も多いが、一個の色名が重複して使われた回数は10回しかない。

要するに、ここで繰り返して、色名の使用回数にふれたのは、筆者の選定した表4および表5に示した系統色名(案)は、全部各色名ごとに前述のような使われた回数、あるいは使用頻度に基づいたものである。

3. 「書き言葉」にある色名と他の色名セットとの比較

表4に示した調査結果はかつて筆者の「色名の初段階調査と研究」¹⁾に発表したものを整理したのであるが、もし他の色名セットとして「色譜」²⁾と「中国の伝統色」³⁾とにある系統色名と比べると、興味ある結果になる。以下「三つの中国語の色名セット」という。

まず、修飾語のない系統色名から見れば、表6に示したように、一文字の基本色名としては、本研究は26個であるが、「色譜」は黒という基本色名1個しかない。「中国の伝統色」には基本色名が全くない。基本色名を採用していないのは、色見本のために特に作ったためであろう。その代り、基本色名を組合せた二文字、三文字系統色名(修飾語を付けないもの)は広範に用いられている。このような色名の全系統色名に占める比率は、本研究案は35%であり、「色譜」では26%であり、「中国の伝統色」では47%である。本研究案では表6に示すように両者の中間に属する。参考までJISの色名の基本色名は一文字が5個、二文字が5個である。

次に表6と表7から見ると、三つの中国語の色名セットで三文字以上の系統色名は、あまり多くない。特に表7に示された色名はJISの色名でたとえると、「明度および彩度に関する修飾語」を付した系統色名に相当する。JISでは「ごくうすい」「うすい」「明るい灰」などの修飾語を基本色名に冠するが、中国語の色名では「淡」「浅」「浅灰」などと一字または二字漢字を添える。「色譜」には、三文字の系統色名は淡紅灰、淡絳紅、淡灰緑、淡緑灰、淡藍灰、淡翠緑、淡藍紫、浅灰緑、深灰藍、暗藍紫、中紅灰の11個しかない(その系統色名の22%)。「中国の伝統色」には、三文字の系統色名は黄棕色、紫絳色、淡灰緑、深褐色、

浅黄棕の5個しかない(その系統色名の17%)。本研究案にも少ない、即ち淡赤褐、淡黄褐、淡灰褐、淡灰黄、淡黄白、淡黄緑、淡紅紫、暗赤褐と8個しかない(常用的な系統色名の5%)。これらは中国語の系統色名の大きな特徴であろう。

また、三者の紫色系の常用的な系統色名は皆、最少であり、「色譜」には淡藍紫、紺紫、紫灰の3個しかない(その系統色名の6%)、「中国の伝統色」にも絳紫、紫絳色、黒紫の3個しかない(その系統色名の10%)、本研究案の常用的な系統色名には紫、紅紫、

表5 本研究により選定された「話し言葉」にある特有の常用的な系統色名(案)

	基本色名の組合せ					修飾語と基本色名との組合せ				合計
紅色系	赤紅	紅棕	赭紅	殷紅	紅灰	艶紅				6
橙色系	紅橙	黄橙	橙灰			淡橙	深橙	淺橙	灰橙	7
黄色系						艶黄				1
緑色系	紫碧	綠灰				嫩綠	墨綠			4
青色系	綠青	翠藍	藍灰			鮮藍	艶藍	蔚藍	淺藍	9
紫色系	藍紫	紫灰				淺紫	灰紫			4
白黒系						淺灰	黝黑			2
小計	15					18				33

表6 三つの中国語の色名セットにある修飾語のない系統色名比較表

色名セット	赤色系	橙色系	黄緑系	青緑系	青色系	紫色系	白黒系	色名の合計	全系統色名数
色 譜	基本色名 基本色名の組合せ						黒	1	50
	紺紅	朱紅	蒼黄	翠綠	藍綠	青灰	紺紫	13	
				綠灰	翠藍	蒼藍	紫灰		
				蒼綠	碧青			0	
中国の伝統色	基本色名 基本色名の組合せ	赭紅	橙	黄	黄綠	紺青	絳紫		30
	棕紅	黄棕色	黄灰	翠綠	青灰	紫絳色		14	
	紅灰			蒼綠	藍灰				
本研究案	基本色名 基本色名の組合せ	(表4と表5にある基本色名とその組合せを参照)						26	174
								62	

青紫、紫白、紫黒、赤紫、濃紫、淡紫、深紫、黒紫、微紫、暗紫、淡紅紫、藍紫、紫灰、浅紫、灰紫の17個である（常用的な系統色名の9.7%）。

そして、表8に示すように「書き言葉」にある色名全体から見ても、紫色系の色名は最少である。つまり、筆者の調査した文献に出た総回数から見ると、紫色系

の色名は5.1%しか占めない。この「書き言葉」の状態は「話し言葉」にある色名とほぼ近い。「話し言葉」にある色名全体には、紫色系の色名は8%しか占めない。この紫色系の色名のあまり使われない状態は古来、孔子が言った「紫が朱にとって代わるのはけしからん」という見方とはなにかの関係があるように考えられる。

表7 三つの中国語の色名セットにある修飾語の付いた系統色名比較表

修飾語	色名セット	色名				合計	修飾語	色名セット	色名				合計
淡	本研究案	淡紅	淡橙	淡褐	淡黄	18	鮮	本研究案	鮮紅	鮮黄	鮮綠	鮮藍	4
		淡綠	淡青	淡藍	淡紫			色譜	鮮紅	鮮綠	2		
		淡黒	淡白	淡灰	淡赤褐			中国の伝説	鮮藍	1			
		淡黄褐	淡灰褐	淡灰黄	艶紅			艶黄	艶藍	3			
		淡黄白	淡黄綠	淡紅紫	色譜			艶紅	1				
	色譜	淡緋	淡赭	淡綠	淡紅灰	10	大	中国の伝説	艶紅	艶黄	2		
		淡緋紅	淡灰綠	淡綠灰	本研究案			大紅	大赤	大綠	大青	4	
		淡藍灰	淡翠綠	淡藍紫	色譜			大紅	1				
		中国の伝説	淡黄	淡綠	淡灰綠			本研究案	黒褐	黒綠	黒藍	黒紫	6
								中国の伝説	黒灰	黒白	1		
深	本研究案	深紅	深橙	深黄	深褐	10	濃	中国の伝説	黒紫	1			
		深綠	深青	深藍	深紫			本研究案	濃紅	濃褐	濃綠	濃紫	4
		深黒	深灰	2	微			本研究案	微紅	微黄	微紫	3	
	中国の伝説	深褐色	深藍	深灰	3	純	本研究案	純白	純黒	2			
	暗	本研究案	暗紅	暗朱	暗黄	暗綠	10	嫩	本研究案	嫩綠	1		
			暗藍	暗紫	暗灰	暗黒			色譜	嫩綠	嫩灰	2	
暗褐			暗赤褐	弱	本研究案	弱藍			1				
中国の伝説			暗紅	暗藍	暗藍紫	3			色譜	弱藍	1		
中国の伝説		暗灰	1	勤	本研究案	勤黒	1						
淺		本研究案	淺紅	淺橙	淺黄	淺綠	7	明	色譜	勤綠	1		
	淺藍		淺紫	淺灰	色譜	明綠			明灰	2			
	中国の伝説		淺灰	淺灰綠	2	中国の伝説			明黄	1			
	中国の伝説	淺黄棕	1	本研究案	抹紅	潔白	汚白	白綠	5				
	灰	本研究案	灰橙	灰褐	灰綠	灰藍	7	其他	色譜	墨綠	1		
灰紫			灰黒	灰白	灰黒	色譜			中紅灰	霽紅	潤紅	6	
中国の伝説			灰綠	灰藍	2	中国の伝説			正灰	1			

表8 本研究案の「書き言葉」にある色名全体の色系分布

色系	使われた色名の総回数	パーセント	平均一冊に使う色名の回数
赤色系	12,104	16.6%	220
橙色系	11,594	15.9	211
黄色系	8,677	11.9	158
緑色系	7,292	10.0	132
藍色系	6,635	9.1	121
紫色系	3,719	5.1	68
白黒系	22,896	31.4	416
合計	72,917	100.0	1,326

表9 本調査に現われている修飾語（63種）が系統色名に使われる回数一覧表

分類	修飾語と使われた回数											
高い明度	淡 171	浅 64	微 31	完 13	嫩 8	明 7	窃 7	薄 6	輝 4			
	閃 4	笑 4	抹 3	潔 3	輕 1							
高い彩度	濃 44	鮮 25	純 23	大 16	正 13	美 12	中 10	艶 6	清 5			
	湛 3	鮮明 3	真 3	嬌 3	原色 3	嬌 2	妮 1	標準 1	全 1			
低い明度	烈 1	弱 1	粹 1									
	暗 111	深 78	焦 9	墨 9	重 3	黒濃 1	烏透 1	深暗 1				
低い彩度	灰 49	黒 37	白 24	汚 18	老 10	淡灰 9	暗灰 8	浅灰 6	濁 4			
	沈 4	陰 3	腐 3	深灰 3	濃灰 2	灰暗 2	雅 2	鈍 2	弱 1			
	曝 1	爛 1	垢 1									

4. 系統色名に用いられる修飾語の調査

系統色名のもう一つの大きな特徴は、修飾語のあることである。そして修飾語でも調査することができる。要するに、修飾語の選定は系統色名そのものと同等に重要と考えられるから、その選定も根拠を明確にしたほうがよいと考えられる。本調査で「書き言葉」と「話し言葉」にある色名の調査によって得た全部の色名数は2,855個である。またその中にある修飾語の全ては表9に示されたように、実に多種多様であり、全部で修飾語数は63個である。それらは2,855個の色名から、その修飾語だけ取り出して統計したものである。それらは勿論、主に「書き言葉」にある系統色名から出たものであり、「話し言葉」にある色名は主に慣用色名であるから、慣用色名は修飾語を使う場合があまりない。参考までにJISの色名の修飾語が5個、明度および彩度に関する修飾語が11個である。

それら2,855個の色名に使われた修飾語は、使用された個数順位によって並べれば：淡、暗、深、浅、灰、

濃, 黒, 微, 鮮, 白, 純, 汚, 大, 亮, 正, 美, 中, 老, 焦, 淡灰, 暗灰, 嫩, 明, 薄, 窈, 艶, 浅灰……などの63個である。そしてこれらの修飾語の中にあるベスト9は, 次に述べる常用的な修飾語とも重複している。またその中の大と艶は, 白, 純, 汚ほど高い順位ではないが, 筆者の4種類の常用的な系統色名に使われたばかりでなく, 他の二種類の中国語の色名セットの修飾語とも重複しているから, その重要性は言うまでもない。

本研究の調査結果では使用頻度の高い常用的な色名数は352個であるが, 中には常用的な系統色名は174個である。表10は常用的な系統色名の中にある修飾語を示したものであるが, それらをまとめて見ると, 全部で20個である。そして各色系は習慣的に異なる修飾語が使われた。その中に1個の常用的な系統色名に頻繁的に使われた修飾語は墨, 勁, 嫩, 白, 抹, 蔚, 潔, 汚であり, 2個の常用的な系統色名に頻繁的に使われた修飾語は純であるが, 3個の常用的な系統色名以上

に頻繁的に使われた修飾語は: 淡, 深, 暗, 浅, 灰, 鮮, 艶, 大, 黒, 濃, 微の11個である。それらは本研究では, 最も重要な修飾語である。しかし, ここでいう1個の常用的な系統色名は, 調査した相手によって37回以上も使われた使用頻度の高い色名であるので, 1個の系統色名しか使われた修飾語といっても, 37回以上に, 頻繁に使われた修飾語になる。3個の系統色名以上に使われた修飾語は, その使われた回数が更に多くなった。

そして, それらはもし他の中国語の色名セットと比べて見れば, その重要性をも確認できるであろう。14人の学者によって選定された表7に示す「色譜」にある系統色名と比べてみれば, その淡, 深, 暗, 浅, 灰, 鮮, 艶, 大, 勁, 蔚, 嫩などは, 筆者の調査結果と重複している。このような修飾語が圧倒的に両者によく使われているのは, なんとといっても淡であり, 両者とも10個以上の系統色名に使われている。

更に表7に示す王定理によって選定された「中国の

伝統色」にある系統色名と比べて見ると, その淡, 深, 暗, 浅, 灰, 鮮, 艶, 黒などは, 筆者の調査結果と重複している。そして両者によって最もよく系統色名に使われた修飾語は, 同じ淡と深とである。

この中に少なくとも7個以上の修飾語は, 三つの中国語の色

表10 中国語の各色名セットにある修飾語が系統色名に利用された個数比較表

著作\修飾語	淡	深	暗	浅	灰	黒	鮮	大	濃	艶	微	純	墨
本研究	18	10	10	7	6	6	4	4	4	3	3	2	1
色譜	10	2	3	2	4		2	1		1			
中国の伝統色	3	3	1	1	2	1	1			2			
著作\修飾語	勁	抹	蔚	潔	汚	白	嫩	中	明	閃	正	潤	霉
本研究	1	1	1	1	1	1	1						
色譜	1		1				2	2	2	1		1	1
中国の伝統色									1		1		

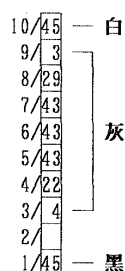


図1 白, 灰の色域図

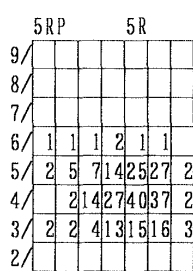


図2 紅の色域図

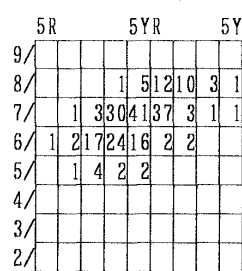


図3 橙の色域図

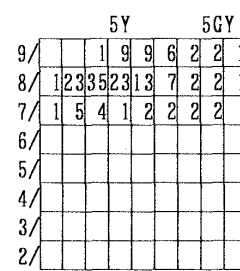


図4 黄の色域図

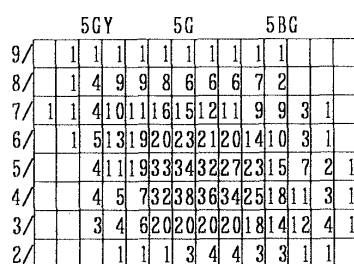


図5 緑の色域図

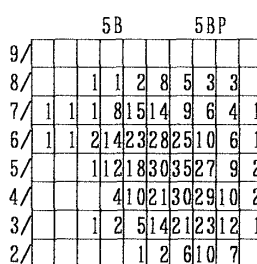


図6 藍の色域図

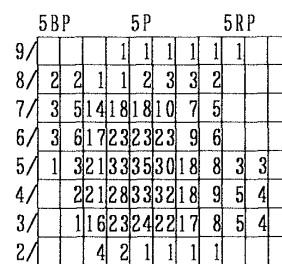


図7 紫の色域図

名セットによって共通に使われた。それから本研究の修飾語の大と黒は、少くとも他の一種類の色名セットの修飾語と共通的に使った、ただ濃と微は、他の色名セットにないが、しかし、濃は44個の系統色名、特に3個の常用的な系統色名に使われた色名であり、微は31個の系統色名、特に3個の常用的な系統色名に使われた色名で、両者とも頻度の高いものと言えよう。そして実用的中国語の色名セットを作るのに、これらの修飾語はどうしても漏らすことのできないものであり、最も重要な根拠と考える。

5. 基本色名が代表する色域と中心色

次に、色名だけでなく、色名の代表色をどのように決めるのかやはり調査によって行わなければならないであろうと考えた。かつて、筆者は慣用色名の代表色について、慣用色名に利用した自然物や人工物の色を広範に測色によって決めた⁶⁾。今回、系統色名の代表色については、利用できる自然物や人工物の色がないので筆者がその代わり、中国語の達者な知識人45人を相手に、色名の代表色をアンケートによって決めた。

その方法論をここで討論してみたい。まず系統色名全体から見ると、基本色名以外の色名は、勿論「Munsell book」や「JIS Z 8721 準拠 標準色票」を試料として被験者に各色名の代表色を一つ指定させたが、基本色名に限っては、バーリとケイのやり方を採用して、マンセル色票にある有彩色320色、無彩色10色を選定して試料セット (standard color stimuli) とする。その320色はマンセル各色相の各明度 (明度 2~9) にある最高の彩度の色票を選定したのである⁷⁾。

即ち、マンセルの色立体にある全ての有彩色の表面とその無彩色の中心の部分の色票

(its colored surface and its white-grey-black core)⁸⁾を選定する。それは図8, 9に示したように、横に2.5R, 5R, 7.5R, 10R, 2.5YR, 5YR……などのような配置をとった。ただし、2.5R, 7.5R, 2.5YRなどの表示が省略される。そしてここに図示したものには使わなかった色相の色票を省略した、例えば図7には2.5P~10RPの色票を省略した。アンケートすることは常用的な基本色名の mapping responseの調査を行うのである。

まず色域 (color range) の調査として被験者に上述のマンセル試料セットを見せて、各基本色名が代表できる色票かを広範に指定させる、そして集計した。図1~7の中の数字はどのぐらいの被験者によって、ある色票をある基本色名の色域内の一つと指定したかを示す。数字が大きいほど、その指定した人数が多いことを示すので、代表性も高くなる。ただし、色域の調査の結果からみると、各基本色名の範囲がかなり広

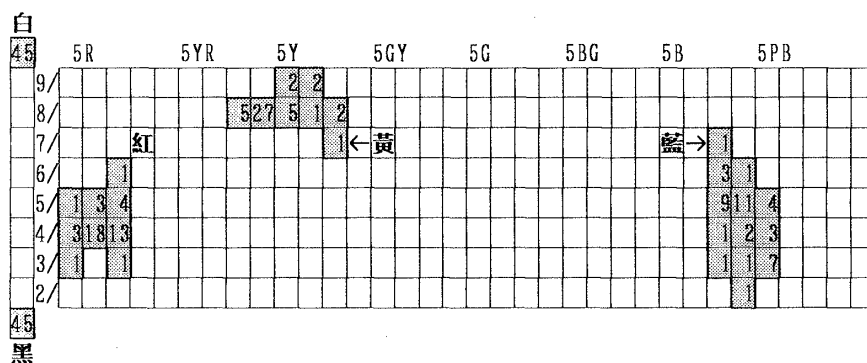


図8 白, 黒, 紅, 黄, 藍の中心色の分布図

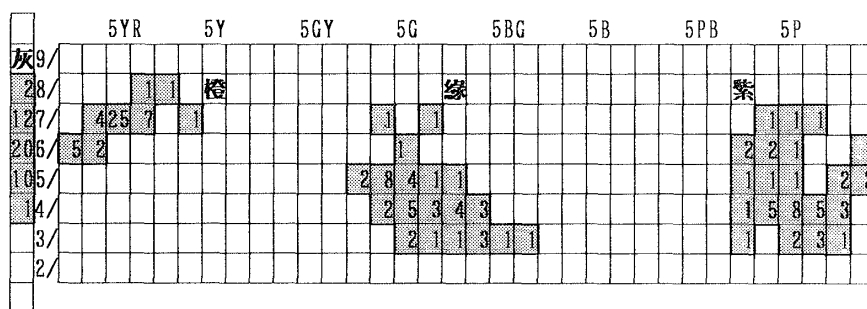


図9 灰, 橙, 緑, 紫の中心色の分布図

表11 本研究案とJISの基本色名との代表色比較表

本研究案	基本色名	紅	橙	黄	緑	藍	紫
	中心色	5R4/14	5YR7/14	2.5Y8/16	2.5G5/12	2.5BP5/12	5P4/12
JIS	基本色名	あざやか赤	あざやか黄赤	あざやか黄	あざやか緑	あざやか青	あざやか紫
	基準値	5R4/14	5YR7/14	5Y8/14	2.5G5/11	2.5PB4/12	7.5P4/12
	基本色名	赤	黄赤	黄	緑	青	紫
	基準値	5R4/12	5YR6/12	5Y8/12	2.5G5/10	2.5PB4.5/10	7.5P5/10

がっているから、各色域図は、個別的に処理する、試料セット図全体を示していないと考えられる。例えば図2の紅の色域図は5RP～10Rの部分しか図示していない。

次に中心色（MacLauryらはcolor fociとしている）のアンケートであるが、即ち上述の色域の調査が完成する時にまた各被験者に、各色域内の各色票の中に最も代表性のあるものを1色ずつ指定させる。その集計した結果は図8、9に示したものである。今回は中心色であるから、その範囲は比較的に集中するので、その図示も試料セット図を大きめに連続的に示した。図8は第1次色に関する基本色名であり、図9は第2次色に関する基本色名である。

ここでいう中心色といっても、各被験者の指定した色票はやはり分散しているから、その最も多くの被験者に指定された色票が最も重要な代表性のある中心色であろうと考えた。例えば紅の代表的な中心色は18人に指定された5R 4/14の色票であった。他の基本色名もそれぞれその最も多くの被験者に指定された色票が認められる。それらは表11に示したとおりである。そしてこの結果を他の色名セットと比較すればその正確さをも検証できるであろう。

それにしても表6に示したように、「色譜」および「中国の伝統色」とも基本色名がほとんど使われていないから、こういう検証を同じ漢字を使うJISの基本色名の基準値¹⁰⁾と比較するしかないであろう。そうすると、表11にも示したように、両者の数値はかなり

近いのである。暖色系の基本色名の代表色が更にもっと一致する。

しかしここに問題がないのではない。つまりバーリとケイのやり方は言語学者E.H.レネバークの1956年の方法⁹⁾を引用したものであり、その後広範に言語学や言語人類学などにも引用されたが、このやり方で問題になるのは、その選定したマンセル試料セットである、つまりその試料セットはアンケートをやりやすくするために、彩度の要素が省略されたことである。その結果として、中国語の基本色名の代表色はJISにある「あざやかな」という修飾語を付けたものにもっと近い。この問題の一步先の探求を、次報の本研究と言語人類学にある基本色名との比較研究にまかせよう。

6. 結論

(1)上述したように、本研究の調査では、三文字の系統色名は5%しか占めていないが、それは「書き言葉」にある系統色名の場合である。「話し言葉」にある系統色名の場合は、ほとんど三文字の色名を使わない。こういう事から見ると、文字数が少ないほど常用的な色名になるのであろう。このためでもあろうか、中国語の色名の研究では、近頃の中国大陆と台湾との学者（筆者を含んでいる）が、「色名は四文字を超えるべきでない」とか「色名は覚えやすく、識別しやすくあるべき」とか「色名は大衆に受け入れられるべき」⁵⁾などの共同意見が出されているのは当然かもしれない。

中国大陆では更に極端に、教育程度の低い大衆に色名調査を行い、そしてそれによって得た色名が最もよい色名と思われる。そうすると、中国語の色名では、学究的な系統色名はあまり存在する余地がないのではない、そして色名そのものも更に簡明に、短くするべきであろうと考えられる。

(2)また、系統色名の全体から見ると、本研究案、「色譜」、「中国の伝統色」の三つの中国語の色名セットでは、それぞれの系統色名は174、50、30個があるが、その重複した色名は翠緑、青灰、艶紅、殷紅、淡緑、灰藍、深灰の7個しかない。それらは勿論、漢字の中にも最も重要な系統色名であろうが、これに対して、それぞれの修飾語は20、16、10個があるのに、その重複したものは表11に示すように淡、深、暗、浅、灰、鮮、艶の7個まで上わまる。つまり、中国語の色名世界には、慣用色名や系統色名に限らず、色名そのものの選定は、往々にして纏めた意見が出されないの

表12 三つの中国語の色名セットにある系統色名の重複状況表

	本研究	色譜	中国の伝統色
各色名セットの系統色名数	174	50	30
各色名セットの重複する系統色名	翠緑、青灰、艶紅、殷紅、淡緑、灰藍、深灰		
各色名セットの修飾語数	20	16	10
各色名セットの重複する修飾語	淡、深、暗、浅、灰、鮮、艶		

表13 本研究案の色名統計表

色名の分類	「話し言葉」 にある色名	「書き言葉」 にある色名	口語と文語の 重複する色名	合計
全部の色名	232	193	73	352
慣用色名	143	52	17	178
系統色名	89	141	56	174

に対して、修飾語の方はかえってかなり容易に同じ傾向が見られる。そして、それらの修飾語には、JISにある「ごく」やISCC-NBSにある「very」のような副詞をほとんど使っていない。

(3)本研究案では、「書き言葉」にある色名のベスト193個には、慣用色名は52個しかないのに対して、系統色名は141個である。つまり系統色名は慣用色名の約2.7倍であった。表12に示すように両者の比率は筆者の調査した「話し言葉」にある色名¹⁾とは正反対である。「話し言葉」にある色名のベスト232個には、慣用色名は143個があるが、系統色名は89個しかない。そこで「話し言葉」にある常用的な慣用色名数は、「書き言葉」にある常用的な系統色名数に近いほうであり、ともに多いほうである。

こういう事は、前に調査した基本色名の代表する色域の広さから見ても理解できるであろう。つまり「書き言葉」は書き綴るものであるから、ゆっくり見ることができるので、各基本色名が広い色域を代表しても、分別することは難しくない。これに対して、「話し言葉」の色名は比較的狭い色域を代表しないと、素早い会話にははっきりした意味を表現することが難しいから、比較的狭い色域をもつ慣用色名を多く使っているように思える。

慣用色名が狭い色域をもつというのは、こういう色名がほとんど自然物や人工物の名前を利用したから、それぞれが自然物や人工物の色に制限されたからであろう。自然物や人工物の色がバラエティにとんでも、その範囲がやはりきまっている。MaerzとPaulの「色彩辞典」¹¹⁾や筆者の調査¹²⁾とも、こういう結論が見られる。「JIS色名帳」には系統色名区分図があるにしても、慣用色名としては、やはりただ「位置」のみを示している¹³⁾。

(4)そこで、一つの実用的な中国語の色名セットを作るのに、「書き言葉」と「話し言葉」にある色名を補い合わせたほうがよいと考える。実は「書き言葉」にある慣用色名と系統色名とをベスト193個に選定したのは、系統色名と慣用色名との数バランスを取るためである。表12に示したように、「書き言葉」にある系統色名の選定が多すぎると、色名セット全体として、系統色名が多すぎる結果になる。そこで、「書き言葉」及び「話し言葉」の色名ともに200前後に選定すれば、互に補い合っ、最終的に系統色名と慣用色名との色名数バランスが取れた中国語の色名セット(案)になると考えられる。

本誌にも既に報告したように⁴⁾、筆者は「話し言葉」にある色名の収集のために、1,815人の被験者に記憶のできる常用色名を思い出させることができた。その収集した1,349個(種)の色名の中から、ベスト232個を選定したところ、それらは74人以上の人に常用と思われる色名であると判明した。本論の表5と表4にある正体タイプの色名とは、それらの系統色名であるが、そのベスト5は、深藍(1,142回)、浅藍(923回)、暗紅(801回)、深紅(793回)、深緑(787回)であった。これは前述した「書き言葉」にあるベスト5の白、黄、黒、紅、緑とは対照的である。

そこで「書き言葉」にある系統色名として141個が得られ、また「話し言葉」にある系統色名は89個が得られたが、「話し言葉」との重複した色名(重複数56個)を除くと、系統色名は全部で174個になった。その中に興味あることは、「話し言葉」にある系統色名は60%以上「書き言葉」にある系統色名と重複していることである。これらの重複した色名は表4にある正体タイプの文字で表示した色名である。

そしてこのバランスを取るための取り扱いに従って、つまり「話し言葉」にある色名のベスト232個、「書き言葉」にある色名のベスト193個を採用することによって、慣用色名も178個が得られたので、174個の系統色名とのバランスがとれたので、筆者の中国語の色名セット(案)としての352個の色数が表12のように選定できた次第である。その系統色名のリストは表4と表5との両方にある；その慣用色名のリストは既報を参照されたい⁴⁾。参考までにJISの色名の系統色名の総数は無彩色30個、有彩色330個、慣用色名は168個である。

(5)以上に色名そのものの選定も、色名の代表色も調査によって決めた。調査によって始めて生活にあるもの、例えば文字数の少ない色名に選定できる。そして厳密的に調査したものが始めて厳密的に製作したもの、例えばJISの数値に近づくであろう。中国語と日本語が同じ漢字を使用しても、漢字の代表する内容は必ずしも同じではないはずであるが、実際にはこんなに近いとは少し信じられないほどである。

6. 謝辞

終りに、この論文を纏めるに際して、東京工芸大学芸術学部久保走一教授、千葉大学工学部矢口博久教授、並びに女子美術大学大学院川上元郎教授の御指導を賜った。上記の諸氏に深く感謝の意を表する。

参考文献

- 1) 呂清夫：「色名の初步調査與研究」，国立台灣師範大学（1985）。
- 2) 周太玄等：「色譜」，中国科学出版社（1959）。
- 3) 王定理，GE企画センター：「中国の伝統色」，大日本インキ化学（1986）。
- 4) 呂清夫：「話し言葉にある中国語の慣用色名の研究」，日本色彩学会誌18-3（1994）179-185。
- 5) 上海流行色協会編：「海峡两岸第一回色彩學術交流會記」，上海「流行色」誌，No. 49（1994）4-5。
- 6) 呂清夫著，「色名與測色—色彩標準化之研究」，国立台灣師範大学（1988）203-250。
- 7) B. Berlin & P. Kay: Basic Color Terms, University of California Press (1969) 5.
- 8) Robert E. MacLaury: From Brightness to Hue—An Explanatory Model of Color-Category Evolution, Current Anthropology, Volume 33, No. 2 (1992) 138.
- 9) Lenneberg, Eric H. and John M. Roberts: The language of experience—a study in methodology. Baltimore: Waverly Press (1956) 25-27.
- 10) 日本規格協会監修，「JIS Z 8102 準拠：JIS 色名帳」（1985）解説の部29-34。
- 11) A. Maerz & M. Rea Paul: A Dictionary of Color, McGraw-Hill (1950) 24-134.
- 12) 同注3。
- 13) 同注10，解説の部19-28。

（受付日：1996年2月27日）

著者紹介



リョウ ケンフ
呂 清夫

1942年9月20日生

筑波大学芸術研究科，構成専攻

1980年修士課程修了

国立台灣師範大学工芸教育学系

及び大学院教授

日本色彩学会会員

芸術学修士

1985年9月から一年間，筑波大学客員研究員